慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フエルヂナンド・ラッサルと独逸労働者（三）「労働者綱領」と「共産党宣言」と並に政治的生涯の発端
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.8 (1917. 8) ,p.1039(51)- 1064(76)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170801-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「思想問題として見たるサンヂカリズム、殊にベルグソン哲學との交渉」に就て吾等に解釋を迫るべき問題は決して一二には止まるまいと思ふ。余は本講演に於て、夫等に關する諸君の深き研究を促す何等かの刺激を與へ得たならば、以て望外の幸福と思ふのである。（了）

フエル・ヂナンド・ラッサルと獨逸勞働者（三）

「勞働者綱領」と「共産黨宣言」と並に政治的生涯の發端

小泉信三

五

「勞働者綱領」は一八六二年四月十二日伯林市外 Oranienburg の「手工業者組合」Handwerkerverein に於て先づ講演せられ、後小冊子として上梓されたものなることは既に述べた。オラニエングルグは當時伯林近郊に於ける機械工場の中心地にして同時に政治上に於ては進歩黨の色彩顯著なる一地區であつた。而してラッサルを招聘した「手工業者組合」も名は手工業者組合であるが、之に屬するものゝ大部分は機械工場の職工だつたのである。演題は「今日の時代と勞働者階級との特殊な

る關係に就て」Ueber den besonderen Zusammenhang der gegenwärtigen Geschichtsperiode mit der Idee des Arbeiterstandes であつた。「勞働者綱領」は其小冊子として公にされるに當つて命ぜられた標題である。而して其內容は如何。之を自由なる言葉を以て抄記すれば大凡そ次の如きものである。

社會の歷史を觀るに一の時代に於ては必ず一の支配者階級 herrschender Stand がある。而して其時々の社會の特色はこの支配者階級の如何に依て定められるのである。今歷史を遡つて中世に到れば吾々は支配者階級を形成するものとして地主（グルンドベツツエル）たる貴族僧侶を見出す。地主は有ゆる點に於て權勢の保有者であり、土地所有の事實は中世の有ゆる制度並に當時の全生活に其固有の特色を刻印したのである。此狀態が一七八九年の佛蘭西革命まで繼續する。併乍ら此間一方に於て地主階級を顚覆し社會組織を根本的に改造せんとする一階級が新に勃興しつゝあつた。動產所有者即ち資本家の階級が是である。この新しき階級は一七八九年に到て遂に革命を宣言した。然り革命を宣言したのである。社會の變革は決して革命に依て作られたのではない。之より先き既に徐々として行はれつゝあつた實質上の變革に對して革命はたゞ形式的宣明を與へたに過ぎないのである。まことに革命以前に於て貴族僧侶は形式上特權階級を成して居た。併乍ら實際の勢力は既に貴族から市民階級（ブルジヨワ）（Bourgeoisie）に移りつゝあつたのである。路易十四世治下の佛蘭西社會に題材を求めたモリエエルの喜劇は當時の貴族が陽に富める市民（ブルジヨワ）を輕蔑しながら、裏面に於て如何に汲々として欵を之に通ずるの陋態を演じつゝありしかを善く描いて居る。（ラツサルは資本家をして、地主階級に代て支配者階級たらしめた經濟上の大變動を叙したる後更に續けて曰ふ）革命はそれが佛蘭西に於て破裂するより以前事實上に於ては既に開始されて居たのである。而して是は凡ての革命に就て同樣である。「人は決して革命を作ること能はず、人はたゞ既に社會の內部に始まれる革命に外部的法律的承認を與へ、之を徹底せしめ得るに止まる。」されば既に社會の船中に完成せる革命を遮ぎり止め又は是に法的承認を與ふることを拒み、或は又助產婦として之に參加するものを非難するは何れも失當の甚しきものである。

斯の如くにして市民階級（ブルジヨワジイ）は佛國大革命以來名實共に社會の支配者階級となつ

た。「所謂貴族政治の後にBourgeoisie專制の次で來らざることを誰か保證し得るものぞ」との憂慮は遂に的中したのである。中世の社會に於て地主が政權を獨占し、又納稅の義務を免かれたと同じ事を今日の社會に於て財產階級は行ひつゝある。即ち彼等は選擧權の享有に納稅資格の制限を設くる事に依て政權を自家に獨占し、又國家の收入の大部分を間接稅に仰ぐことに依て事實上課稅を免除されて居るのである。

要するに從來の歷史は之を一七八九年を境として前と後との二の時代に分つことが出來る。第一の時代に於て支配者階級をなすものは地主であつた。第二の時代の支配者は資本家である。併乍ら――ラツサルは語を强めて曰ふ、――併乍ら此の第二の時代も內部的には今日既に終末に達して居るのである。一八四八年二月二十四日を以て更に新しき時代の曙光は既にさし始めたのである。此日佛蘭西に一革命破裂し勞働者を委員の一人とする所の假政府は國家の目的は勞働者階級の境遇改善にありと公言し、又普通直接選擧制を實施して苟も市民の年二十一に達したるものは其財產狀態の如何に論なく等しく國政の決定に參與せしむ可き旨を宣言したのである。見る可し、一七八九年の革命を以て第三階級の革命なりとするならば今次の革命は實に第四階級の革命である。一七八九年の革命當時第三階級の懷に隱れて是と行動を共にしたる第四階級は今や別に起ちて其原理を社會の支配的原理（das herrschende Prinzip）となし、之を以て社會の有ゆる制度を貫かんとしつゝあるのである。

然らば則ち嘗て第三階級が貴族僧侶に取て代りしが如く、第四階級は自ら第三階級に代つて新なる專制支配の時代を現出せんとするか。曰く否。第四階級と他の階級との間には重要なる差別がある。第四階級は最後の階級、最極端の階級、社會より勘當されたる階級（エントエルブテルスタンド）である。從て第四階級は地主の如く又資本家の如く新なる特權階級を形くる可き何等の排他的獨占的要素を有つて居ない。何等かの方法に於て社會の爲めに有用ならんことを期する限りに於て吾々は凡べて均しく勞働者である。「第四階級は其身內に何等新なる特權設定の萠芽を藏して居ない。從て第四階級と云ふも全人類と云ふも其意味は同じである。故に第四階級の問題は即ち人類全體の問題であり、第四階級の自由は人類の自由であり、而し

て第四階級の支配は凡べての人の支配に外ならぬ。」されば勞働者階級の支配を叫ぶものは決して階級の對立、階級の軋轢を叫ぶものではない。此叫びは調停の叫び調和の叫び一致の叫び、而して愛の叫びである。

ラッサルは更に進んで勞働者階級の主張(Prinzip)を三箇の點に就て觀察して居る。第一は主張實現の形式的手段第二は勞働者階級の倫理的意義而して第三は勞働者階級の國家觀である。第一の點に就て、勞働者階級の特色は普通直接選擧法を要求する點にあると云ふの外ラッサルは多くを云つてない。たゞ讀者は之に依て普通直接選擧の主張は決して「公開答狀」に於て始めて現はれたものでない事を見出すであらう。

第二の點に就ては人或は以爲く、社會の最下層にある勞働者階級が支配階級となり、勞働者階級の原理(プリンチップ)が社會の支配原理(ヘルシエンデスプリンチップ)となるならば其は道德的退步を意味するであらうと。併乍ら之は偏狹の見たるを免れぬ。蓋し此點に就て勞働者階級は自余の特權階級と全く異なる境遇に居るのである。從來の特權階級は常に排他獨占の要素を含むで居た。從て自家の利益を擁護し又之を上進せしめんが爲めには必ず他を排斥して其獨占的地位を強固にしなければならぬ。然るに元來文明の進步は常に上層階級の支配的地位を保障せる特權の廢止、と云ふ方向に向ひつゝある故に、從て特權階級は常に文明の進步に對しては原則上敵對的態度(ファインドリッヘステルンク)を取らなければならぬ約束を持て居る。左れば特權階級が自家の境遇を改善せんとする努力は必然的に利己主義なる背德に導くのである。之に反して勞働者階級は本來何等の排他獨占の要素を含まざるを以て自家の地位を高めんとする努力は決して利己主義に陷るの恐れなく、却て常に全國民の發展、理想の勝利、文化の進步自由の發達と一致す可きものである。固より下層階級に於ても全く利己主義なしと云ふことは出來ない。併乍ら此場合の利己主義は個人の欠陷から生れるので決して階級其者に必然伴ふ欠陷ではないのである。此點に於て第四階級は他の特權階級と境遇を異にして居るのである。されば、ラッサル續けて曰ふ「是れ實に吾輩が何故に第四階級支配の時を以て道德文化學問が未曾有の盛觀を呈す可き時代なりとなすかの理由である」と。

第三の點に關してラッサルは其生涯を通じて諭らざる國家崇拜(Staatskultus)の

立場を明にする。以爲く第四階級は第三階級と全く其國家觀を異にする。第三階級の國家觀は自由放任主義である。國家の任務は個人の人格的自由と其財産とを保護することにのみ存すとする思想である。此國家觀を名けてラッサルは「夜警說」Nachtwächteridee と呼んで居る。蓋し以爲らく第三階級の觀る所に從へば國家は盜を防ぐ一事にのみ其存在の理由を有し若し之なくんば國家は無用なりと云ふに歸着するからである。思ふに各個人の能力相均しきものとすれば吾々は差支なく此國家觀を承認することが出來るであらう。併乍ら事實に於て個人の能力は平等でない。從て第三階級の國家觀を承認するは弱肉强食の慘狀を是認するの結果に陷るのである。今第四階級の國家觀は全く之と異なる。「抑も歷史は之を要するに人間の自然や、困窮（エレンド）や、無知や貧困（アルハウト）や無力（ハトロジヒカイト）に對する鬪爭、一言にして云へば有ゆる不自由（ウンフライハイト）に對する鬪爭の經過に外ならぬ。漸次此の無力の狀態を克服すること、是れ即ち歷史が吾人に示す所の自由の發展である。」然るに此鬪爭は單獨なる個人の能くし得る所でない。然らば如何にす可きか。ラッサルは此處に人類の文化に對する國家の職責を發見する。故に曰く「國家の目的は人類をして積極的發展（ポジチイエエントフアルツング）間斷なき進步を遂げしめる事にある。別の語を以て云へば、人類の使命即ち文化（クルツア）を實現せしめる事、更に換言すれば自由に向て人類を敎化し發展せしむる」の一事に存するのである。而して勞働者階級は元來窮困無援の地位にあるを以て國家の任務は個人を助けて其單獨に能くせざる所の發展を遂げしむるに在ると云ふ道理を强き本能に依て直覺するのである。

却說一八四八年を以て始まる新しき時代の責任は此國家的理想を實現する事にある。而して吾々は宛も此時に生れ、此の光榮ある歷史的事業に參加し得る事を深く慶賀しなければならぬ。此事業を行ふ可きものは勞働者階級である、勞働者諸君、「諸君は實に今日の殿堂が其上に建立さる可き盤石である。」「幸にして今日聽衆の中に二三の人ありて吾輩能く其人の思想に點火することを得たならば此講演は善く酬ひられたりと云ふ可きである。」斯く述べ來つてラッサルは漸く已れが雄辯の魅力を自覺しつゝ聲を改めて曰ふ「諸君、學問の山頂に立つものは渾沌たる日常生活に沒頭するものよりも早く新しき日の曙光を見る。」

「諸君は曾て高山の頂に立ちて日の出を眺めたることありや。地平線に接する紫

の空は新しき光を告げ知らせつゝ漸く紅味を帶びて來る。霧と雲とは塊を成して曙光を迎へ、一瞬時其光りの放射を妨げる。併し乍ら地上の如何なる力も徐々として而かも崇嚴なる太陽の出現その者を妨げることは出來ない。一時間の後其太陽は全世界を照らし、又全世界を暖めつゝ高く中天に懸つて居るのである。

日々自然の現象に要する一時間は實に更に遙かに雄大なる世界史上の日之出に於ける二十年三十年に當るのである。」

「勞働者綱領」の要旨は之で盡きて居る。（前掲ラツサル全集、第二卷第九―五〇頁）

六

少しく社會主義の文獻に通ずるものは容易に心着くであらう。「勞働者綱領」に於けるラツサルの立場は實に「共產黨宣言」（一八四八年）に於けるカアルマルクスと同じ立場である。兩者に取りて共に歷史は階級爭鬪若くは階級支配の歷史である。而して現在社會に於て相爭鬪する所の階級は市民階級（ブルジヨワジイ）と勞働者階級（プロレタリヤ）なる事、而し勞働者階級は今や將に過去に於て市民階級が勤めたる同じ役目を演じ、市民階級が封建制度を覆へしたると同樣に市民階級と從て同時に市民階級を支配者とする今日の社會を破壞して新しき社會を建設す可き革命的使命を擔へること、而して又勞働者階級なるものは社會の最後の階級にして、自らブルジヨワジイの壓制より脫せんが爲めには獨りブルジヨワの支配を覆へすのみならず同時に永久的に一切の階級壓制一切の階級爭鬪を根絕するの擧に出でざる可らざることを主張する點に於てラツサルはマルクスと全然同じ立場に立つて居るのである。

ラツサルとマルクスとの交際は何時頃から始まつたか筆者は之を詳にしない。（一八四八年騷擾に際し、ラツサルがマルクスの新萊因新聞に寄稿して革命運動に聲援した事は既に前に述べた。）Franz Mehring に依て公にされたマルクス、エングルス宛ラツサルの書簡集は、一八四九年二月二十八日附のものを以て始まつて居る。併し乍ら二人間の交通は是れ以前に始まつて居た事は既に此書簡に依ても明かである。而して交通は一八六二年夏ラツサルが倫敦にマルクスを訪ねた時を以て終つて居る。是等書簡の內容に由て吾々はマルクスとラツサルとの交際が可なり親密なものだつた事を知る事が出來る。（マルクスのラツサルに對して奈何の感情を抱いて居たかは明かでない。マルクスが屢〻ラツサルの消息に答へな

かつた爲めラツサルをして焦慮せしめ不快ならしめた事實は後者の書簡に由て窺ふことが出來るのである。）同じく此文通に依てラツサルが常にマルクスに兄事し、學問上就中經濟學上の問題に就ては特に其說に傾聽した事は明かである。ラツサルは書中屢〻マルクスの著作（「哲學の貧困」及び「經濟學批評」）に言及し、之に對して讃嘆の辭を呈すると同時に更に思を潛めて之を熟讀玩味す可き事を約束して居るのである。（書簡第九、第六二、及第七一、參看）而して別にエンゲルスが「共產黨宣言」英譯の序文中に明記する所に從へばラツサルは個人としてマルクス、エンゲルスに對する時には常に自らマルクスの弟子たることを承認して居たのである。

今自分が是等の事實を玆に擧述するのは「勞働者綱領」に對するマルクス殊に其「共產黨宣言」の影響を明にし度いと思ふからである。併乍ら之を爲す爲めに是等の外部的事實を擧示するのは實は無用なのである。「共產黨宣言」と「勞働者綱領」との關係を知らんと欲せば、是兩者を取て直接に相比較するのが最も簡單の方法なのである。そこで此機會に於て社會主義文書中最大の古典たる「共產黨宣言」に就て少しく記さなければならぬ。

七

「共產黨宣言」Manifest der kommunistischen Partei は一八四八年一月「共產主義同盟」Bund der Kommunisten の爲めにカアル・マルクス及びフリイドリヒ・エンゲルスの二人に依て獨逸語を以て起草せられた。併乍其核心をなす提案がマルクスより出でたることはエンゲルス自らの明言する所である。其內容は小引を除いて（一）市民（ブルジョワ）と勞働者（プロレタリヤ）（二）勞働者と共產主義者（三）社會主義的及び共產主義的文書及び（四）在野諸黨派に對する共產黨の地位の四小節に分たれて居る。右の中最も重要の部分は第一節に含まれて居る。自分が取て「勞働者綱領」と比較しやうとするのも亦此部分に外ならぬ。

マルクス筆を起して曰く「一切社會の歷史は階級爭鬪の歷史也」。希臘の自由民と奴隸、羅馬の貴族と平民、中世の領主と隸農、手工業親方と職人、一言にして云へば壓制者と被壓制者とは常に爭鬪を繼續して來た。而して其爭鬪の結果は社會の革命的改造に終るか、或は爭鬪者双方の破滅に終るかの何れかである。封建社會の廢墟より起れる今日の市民社會（資本主義社會）に於ても階級爭鬪は依然として

行はれて居る。たゞ今日の階級爭鬪は形ちが極めて單簡明瞭なるを以て其特色とする。今日の社會は相鬪ふ二大階級相對立する二個の陣營に分れて居る。市民と勞働者とが即ち是である。

市民階級の第一の萠芽は素と隷農より起れる中世の所謂特許市民 chartered burghers に求めることが出來る。而して市民階級をして大發展を遂ぐるを得せしめたるものは亞米利加の發見、喜望峯の廻航に續く市場の大擴張及び交通商業の大發達であつた。工業上の封建制度即ちギルド手工業は最早新しき大市場の需要に應ずるに足りない。そこで手工業に代て「マヌフアクツア」制度(機械を用ひざる工場制度)が起つた。併乍らマヌフアクツアの制度も亦絶えず增進して止まざる新市場の需要を充たすには足りない。此時に當て蒸汽機關並に大機械の發明は生產方法を一變せしめた。そこでマヌフアクツアに代て近世大工業なる巨人が出現した。此大工業の支配者は即ち近世の市民(アルジヨウ)(資本家)である。而して近世市民の發達並に其資本の增大と共に中世より殘存せる他の諸階級は漸次舞臺背景の後ろに排斥されて行くのである。「故に見る可し、近世の市民其者は實に長年月の發達の所產にして、生產交換の方法に於ける幾多革命の結果として生れ來れるものなることを。」而して市民階級は發達の歩一歩毎に其政治上の地位を高め、「近世工業及び世界市場の建設せられてより遂に近世代議國家に於ける政權を擧げて手中に獨占するに至つた。近世國家の政府なるものは要するに全市民階級の共通事務を處理する一委員會に過ぎないのである。」

然らば此市民階級の將來は如何。マルクスは生產交換手段の發達の結果として必然的に封建制度が市民階級に依て覆へされ、更に同一原因に依て市民階級が勞働者階級に依て顚覆せらる可き理法を說明して曰ふ。抑も「市民階級の基礎をなせる生產並に交換手段は既に封建社會に於て萠芽を發したものである。然るに此生產交換手段が發達して或階段に達すると封建社會の生產及び交換條件、即ち農工業の封建的組織、一言にして云へば財產の封建的關係と既に發達せる生產力とが相適合しなくなつて來る。財產關係が發達せる生產力の障害物となるのである。そこで彼等は當然破裂しなければならなくなり、而して遂に破裂したのである」斯くの如くにして資本主義の社會は生れた。然るに「同樣の運動は今再び

吾人の目前に於て行はれつゝある。」資本主義の下に於て發達せる絶大なる生産力はその餘りに發達せるが爲めに再び資本主義的財産關係に適合しなくなつたのである。其狀は宛も呪文を以て魑魅魍魎を喚び起こしたる魔術師が之を制御する力を失つて爲す所を知らざるにも譬へることが出來る。最近數十年間の商工業史は實に近世の生産力が、市民階級の存在並に其專制の要件たる今日の財産關係に對して叛逆を試みつゝあるの歴史に外ならぬ。此理を説明する爲めには彼の商業的恐慌が定期的に襲來するの一事を擧ぐれば充分であらう。今日の社會に於ては殆ど期を定めて恐慌が襲來し、其度毎に莫大なる生産物並に生産力が破壞される。而して其原因は何ぞやと云へば生産過剰である。別の語を以て云へば「文明の過剰、生産資料の過剰、工業の過剰而して商業の過剰」である。社會の權下に在る可き生産力は最早や資本主義的財産關係の發達を助けずして、却て此財産關係に對して餘りに有力になり、其拘束を窮屈と感ずるに至つたのである。而して其生産力が一度現在財産關係の制限を超過するや、市民社會全體は爲めに混亂に陷り、財産制度の存在は之が爲めに危ふせられる。要するに市民社會の條件は餘りに狹隘にして今日の生産力を以て造られたる富の全部を包容することが出來ないのである。而してブルジョワジイは此恐慌に對し、一方に於ては生産力の一部分を破壞し、他方に於ては新市場を征服し若しくは一層完全に舊市場を掠奪することに依て之を防遏せんとする。言を換へて云へば將來一層廣大に且つ一層恐る可き恐慌を招致し、又將來に於ける恐慌防遏の手段を減却せしむるが如き方法に依て現在の恐慌を免れんとするのである。されば「市民階級が嘗て封建制度を破碎するに當て用ひたる武器は今や市民階級自らに向けらるゝに至つたのである。」「然るにブルジョワジイは獨り己れ自らを殺す可き兇器を鑄たるのみならず、同時に又其兇器を揮ふ可き人間を作り出した。近世勞働者階級即ちプロレタリヤは是である。」

勞働者階級は市民階級即ち資本が發達するに從ひ之と比例して發達して來た。抑も勞働者階級なるものは仕事を見出し得る限りに於てのみ生存し得るものであり而して其仕事は彼等の勞働が資本を增殖する限りに於てのみ之を見出す事の出來るものである。其身を切賣しなければならぬ勞働者は實に一個の貨物に

過ぎずして他の商品と同じく、競爭場裡の變動、市場の動搖に曝さるゝの運命を免れることが出來ないものである。然るに凡べて商品の價値從て又勞働の價値は其生產費に依て定まる。今近世勞働者の勞働は機械の發達と分業との爲めに全く個人性と從て又勞働の興味とを失ひ、其爲す可き所は最も容易に習得し可き單純單調の部分的作業に過ぎないのである。從て斯の如き勞働者を生產するの費用は自己の生存の爲め及び種族の傳播の爲めに要せらるゝ生活資料を以て足るの道理である。從て、作業愈〻單調にして勞働益〻不快となるに伴つて賃銀は次第に減少しなければならないのである。而して是等勞働者は大工場に集められ軍隊的組織の下に毎時毎日機械の爲めに、職工長の爲めに其又雇主の爲めに奴隷として驅使される。而して此壓制の目的が一に營利にあるの事實が明白となるに從ひ勞働者の之に對する不快憎惡怨恨は益〻甚しきを加へるのである。一方に勞働者は他の社會階級より絶えず補充を受ける。蓋し中等階級の下層に在る、小商人、手工業者及び小農等は或は大資本家との競爭の爲めに壓倒せられ、又或は生產技術に革命ありしに由て彼等が習得せる專門技術が不用に歸したる爲め何れも勞働者階級に沒落せざるを得ないのである。

勞働者階級は其發生するや直ちに市民階級と衝突の端を開く。其衝突は始めは盲目的偶發的個人的地方的であるが「工業發達すると共に勞働者は啻に其數に於て增加する許りでなく、同時に漸次集中して大集團をなし、其勢力は增加し、且つ一層其勢力を自覺するに至る。」一方機械の發達の爲めに勞働の「差別は漸く消滅し、殆ど到處に於て賃銀は同じ低率にまで引下げられ、之と同時に勞働者階級內に於ける各種の利害、各種の生活狀態は漸次平等に近づいて來る。同時に資本家間の競爭從て其結果たる恐慌激烈となるに連れ、勞働者の賃銀は益〻動搖し、又間斷なき機械の進步の爲めに勞働者の生活は愈〻益〻不安となつて來る。茲に於てか「個々の勞働者と個々の市民との衝突は漸く階級と階級との衝突の性質を帶びて來るのである。」そこで勞働者は團結を作つて市民に對抗する、その團結は同じく近世工業の產物たる交通機關の發達に依て速かに全國に普及せしめられ、茲に全國的なる一大階級爭鬪は成立するのである。

然らば勞働者と市民階級との爭鬪の結果は如何。思ふに凡て從來の階級が支

配權を掌握するや其力むる所は社會全體を自家の掠奪條件に服從せしめ、之に依て既得の地位を擁護することであつた。然るに元來勞働者階級は保護し防禦す可き何物をも持て居ない。從て彼等は現在の掠奪法を廢止すると同時に一切の掠奪を廢止することに依てのみ、社會の生産力を支配することが出來るのである。勞働者の使命は有ゆる個人財産の安全と保障とを破壞する事に存する。「歴史上一切從來の運動は少數者の運動か又は少數者の利益の爲めの運動であつた。反之、プロレタリヤの運動は最大多數の利益の爲めにする最大多數の自覺せる獨立運動である。現在社會の最下層たるプロレタリヤは社會上層の全部を空中に破裂せしむるに非ずんば決して自ら起つ事能はざるものである。」

「市民階級の存在及び支配の最肝要なる條件は資本の形成と增殖とである。而して又その資本の條件は賃銀勞働である。而して賃銀勞働なるものは全然勞働者相互間の競爭を基礎とするものである。然るに市民階級が不知不識して促進せる工業の發達は孤立せる勞働者をして革命的團結を形くるに至らしめる。左れば近世工業の發達は自ら市民階級の生産並に掠奪の基礎を崩壞せしむるものであると云はなければならぬ。故に市民階級が作り出す所のものは第一に己れ自らの墓穴を堀る者である。市民階級の壞倒と勞働者の勝利とは共に事物の避け難き數である。」（「共産黨宣言」公定英譯七―十六頁）

八

讀者をして「勞働者綱領」と比較することを得せしめん爲めに以上稍〻詳かに「共産黨宣言」の梗概を述べた。「勞働者綱領」に於て守れるラツサルのMarxistとしての立場は今や何人の目にも明かであらう。固よりマルクスとラツサルとの間に相違は認めなければならぬ。其最も重要の點は支配者階級隆替の必然性を説明する上に於てラツサルが精確と詳密とを缺いて居る事である。何故に封建制度は第三階級に依て覆へされなければならなかつたか。又何故に第三階級は第四階級に依て倒さる可き約束を持て居るか、彼は既に「人は決して革命を作ること能はず、人はたゞ既に社會の内部に始まれる革命に外部的承認を與へ得るのみ……」と云ひ、革命の必然を承認して居る。併し乍ら其何故に然るかの説明は不充分と云はなければならないのである。嚴密に云へば斯の如く批評の餘地はある。併乍

ら之が爲めに「勞働者綱領」が「共產黨宣言」の立場に立つ優秀なる一社會主義文書であると云ふ事實は決して傷けられないのである。ベルンシユタインが之を評して、其講演せられたる時と事情とに適應せる「共產黨宣言」の改作 Umschreibung なりと云ふも決して其價値を減ずる所以に非ず」と云つたのは（全集序文九八頁）善く當を得て居る。エンゲルスは前記「宣言」序文の中に於て、ラツサルは個人として吾人に對する時はマルクスの弟子たることを承認して「宣言」を基礎として立ちたれども、一八六二年より六四年に及ぶ公の運動に於ては國家信用の補助を受くる生產組合を要求すること以上に出でざりき」と記して居る。併乍ら、之は「公開答狀」（一八六三年）以後のラツサルに就てのみ妥當である。勞働首領として career を始めるに當つて「勞働者綱領」に依て彼は公にもマルキシストたるの立場を表明して居るのである。

ラツサルは雄辯家であつた。而してオラニエンブルグに於ける講演は印刷に附せられたものを讀んで見ても猶ほ甚だ魅力ある文字に富んで居る。左れば此講演は恐らく非常の喝采を以て酬ひられたであらうと想像するのは無理のない所である。然るに事實は之に反して居た。恐らく其餘りに學者的にして聽衆に取つては難解に過ぎた爲めであらう。講演は所謂成功せるものではなかつた。同時に其場に臨席した警察官も亦、講演に含まれた思想の危險性を覺ることなく、河等の干涉を之に加へなかつたのである。然るに檢事局は烱眼であつた。即ち、ラツサルが此講演を印刷に附するや其全部沒收せしむると同時に檢事 Schelling（哲學者 Schelling の子）は「有產階級に對し無產者階級の憎惡と輕蔑とを煽動したる」の廉を以てラツサルを起訴した。之に對して伯林地方裁判所は（一八六三年一月）禁錮四ヶ月の刑を宣告したが、控訴の結果一百タアレルの罰金に輕減された。（一八六三年十月）此兩度の公判は充分雄辯と討論應酬の技倆とを發揮して縱橫に裁判長と檢事とを翻弄する機會をラツサルに與へると同時に彼をして自己辯護の爲めに二篇の小冊子を著はすことを促がした。「科學と勞働者。伯林刑事裁判所に於ける院辯護演說」Die Wissenschaft und Arbeiter 及び「間接稅と勞働階級の地位と。控訴に於ける辯護演說」Die indirekte Steuer und die Lage der arbeitenden Klassen がそれである。是等は何れも「勞働者綱領」の新版と同じく瑞西に於て上梓せられたのである。

兎に角オラニエンブルグ手工業組合に於ける講演と其れに引き續く裁判事件と並に「辯護演說」とは世間の注目を引いた。而して漸くラツサルを勞働者に向て近づけたのである。

此間にラツサルは又時の政治問題に關聯して憲法論をも公にした。元來ラツサルは當時民權の代表者たりし進步黨に接近する意思を持て居なかつたのでは決してない。併乍ら或個人的感情と主張見解の不一致とは漸く彼を進步黨から遠ざけた。而して彼れが「憲法論」Über Verfassungswesen 及び「今や何をか爲す可き」Was nun? と題して講演した二回の憲法論は彼と進步黨との斷絕を促進する機會となつたのである。彼は第一の講演（一八六二年四月十六日）に於て憲法問題は畢竟實力問題である。成文憲法はそれが現實の權力關係の表現たる限りに於てのみ眞の拘束力を持て居る。今例へば國王貴族が軍隊と大砲とを擁して實勢力を有する限り、之に反する憲法明文の保障は實際に於て何等の保障となるものでないと云ふ意味を述べた。（此講演の要旨は田中萃一郎教授の論文「國家の生物學的觀察」中にあり。三田學會雜誌第十一卷第四號二九―三六頁を看る可し）第二の講演は一八六三年の始めに於て行はれた。此時所謂「憲法爭鬪」は險惡の頂點に近づきビスマルクは既に下院を無視して無協贊の豫算案を實行し始めて居たのである。ラツサル以爲らく政府の態度既に斯の如くなる以上は進步黨の取る可き途は一あるのみ。それは事實を在りの儘天下に暴露することである。今や口舌を以て政府と爭ひ、正義と暴力、立憲と違憲とを論ずるは悉く無用である。下院は斯の如き政府に向つては一切の取引を中止す可きである。即ち議會は一切の妥協を排し斷然として自ら一切の議事を停止す可きである。斯くすれば事實上に於ける無憲法の狀態は始めて表面の上に暴露される。是れ最も政府を屈せしむるの方法である。蓋し政府は固より憲法政治の實を欲しないけれども憲法政治の美名は外交其他の關係上必ず之を保つ必要を感じて居るからである。ラツサルの此講演を進步黨は喜ばなかつた。黨の機關紙は筆を揃へて彼を攻擊した。ラツサルは暴力を以て權利正義の上に置くと云ふのである。茲に於て彼れは「權力と正義」"Macht und Recht" と題する公開狀を發表し、遂に進步黨に向て斷絕を宣告したのである。其中に曰く、今日プロイセンに於ては何人も權利（正義）を云々するの

權利なし。其の能く之をなすは古き眞實の民主黨（デモクラチイ）あるのみ。進歩黨は正義を口にするの權利なし、何となれば彼は明々白々なる正義の蹂躙を承認せるを以てなり。民主黨に於てのみ凡べては正しく、民主黨にのみ實力は存す可し。云々。

斯の如くラツサルは一方に於て「勞働者綱領」に於て立場を明にすると同時に他方に於て其進歩黨と事を共にす可き途は塞がれて仕舞つたのである。今や彼れの進む可き道として殘る所はたゞ一つあるのみ。

Flectere si nequeo Superos, Acheronta movebo.

（天上の神々を動かすと能はずんば退いて地底の諸魔を起たしめん）

ラツサルが嘗て其著「伊太利戰爭」の表紙に引用せる Virgil の詩は今や彼れ自らの生涯を歌ふものたらんとするのである。（未完）

（廣告主へ御注文の節は三田學會雜誌廣告に依る旨御附記を望む）

第二十一版

銀行會社要錄

附役員錄

本書は日本全國は勿論新領土及關東州に存在する商事會社の登記事項及最近決算の大要を網羅せり今や我經濟界稀有の進運を來たせるの秋に方り諸會社事業の狀況を究め新設會社の内容を審にせんと欲するもの、好伴侶なり

菊版二千三百餘頁クロース製金字入　正價金四圓

發行所　東京日本橋區坂本町　東京興信所

賣捌店　東京、大阪、京都、福岡、仙臺　丸善株式會社